

研究専攻（専門領域）		文化構造研究専攻		学籍番号	05CS004
氏名	伊丹 淳	ローマ字	Itami Jun	国籍 (留学生)	
修士学位 論文名 特定課題研究名	現実の驚異を、一層、深く味わうための知覚と記号についての考察 —E.カッシーラーの〈表出 (Repräsentation)〉概念に定位して—				
提出年月日	2008年2月20日	指導教員	高橋 克也		
体裁 (論文)	43頁 (1頁文字数 1440字)	言語	日本語		
別冊添付資料等	なし				
キーワード	Repräsentation (表出)、カッシーラー、ベルクソン、知覚、記号				
<p>本稿は、E.カッシーラーの『シンボル形式の哲学』における中心概念である〈Repräsentation〉機能に定位して、直接経験という求心的方向へ収縮していくベルクソン哲学との対決を通じ、遠心的であると共に求心的な深まりを見せるような、現実認識の方向と可能性を見定めようとした試みである。</p> <p>第一部では知覚を主題としている。第一章ではまず、ベルクソンの『物質と記憶』を手引きとして、現実の驚異を覆う習慣の正体を明らかにするとともに、習慣的な知覚の位相を超えて行く方法を検討した。そこで注目したのが、事物から働きかけられる知覚の位相から、精神からの能動的な反射を伴う知覚の位相へ高まること、つまり、現前する知覚へとますます多くの非現前的な記憶を浸入させるということであった。これを受けて、第二章では、ベルクソンにおいて記憶の名の下に一括されている知覚世界を織り上げる諸契機を、カッシーラーの立場から修正・補完するよう試み、これをいくつかの〈Repräsentation〉機能の様態へ分析した。その過程で、個々の知覚が〈意味〉を表出すること、換言すれば、われわれの知覚には、文字通りの意味では現前しない、非直観的な〈意味〉が宿っていることが示された（これがベルクソンの記憶が呼んだものに対応している）。このことは、われわれの眼は、事物からの働きかけによって現前するものだけを、受動的に受け取ってそれで満足している光学器官なのではなく、現実の〈意味〉を能動的に捉える^{ベグライフェン}精神の眼であることを意味する。それゆえ、こうした意味による充填こそが、遠心的な広がりを見せると共に求心的な深まりを知覚的現実を与えるであろうと結論される。</p> <p>第二部は記号を主題としている。ベルクソンにとっては、概念記号は現実を単純化し、行動的対処を促すレッテルとしての実用的側面しか評価されない。しかし、われわれはこうした概念理解の一面性とその暗黙の前提を、〈Repräsentation〉を記号原理に据えるカッシーラーの概念理論の分析を頼りに暴き出し、記号の現実認識に果たす積極的な認識論的価値の可能性を論じた。記号には、現実を濃縮し、認識を新たに深めていくための方向を定めるといふ予見的で創造的な機能が備わっている。それゆえ、記号の力を借りることで、われわれの現実はますますその〈意味〉を充実させていくことが可能になると結論される。</p>					